

●春日部市民文化講座（第16回）

◆日 時：2015年7月29日(水) 10時（ぼぼら春日部4階会議室）～12時

◆テ ー マ：講演「漆工芸に親しむ」

講師：増村 紀一郎さん〔髹漆作家（人間国宝）〕

◆ゲスト紹介：《前掲と同じ》

■漆のことを学ぶ！

学生時代に木曾平沢で漆職人の皆さんと出会い、一生呑気に職人だ作家だなんて考えていたけれども、自分が使う漆は一年間でほしい茶碗一杯分で渡世できるのですが、この漆はどうやって作るのだろうか。どういう人が関わって・・・ということの木曾平沢の産地を歩き来している間に考えました。実は木曾平沢で使っている漆はほとんどが中国産だったので。木曾平沢では、中国の漆以外でも日本産の漆がありました。私の家では日本産漆を使っていたので、今度は日本産漆のことを調べなくては・・・と思いました。調べていくと、長野県にも日本産の漆を育てている所があり、篠ノ井線、松本から長野へ行く途中に姨捨だとかありますが、この辺りで採れるんですね。そして日本で一番採れるところはというと、岩手県の二戸市浄法寺町なのです。青森県の県境に近い岩手県ですが、国産漆の90%が作られています。そんなことで背景が分かってきたのです。



■漆掻きの仕事の流れ

漆の木に傷をつけると、木はその傷を治そうとして、傷の部分に木の中を流れている樹液を集めます。傷をなおそうと集まってきた樹液を、ヘラを使ってかき集めるのが漆掻き職人さんの仕事です。

1. 刃付け：実際に、漆の木に傷をつける最初の作業を「刃付け（へんつけ）」という。
2. 刃掻き：一山の4つのグループ全てに「刃付け（へんつけ）」が終わったら、最初のグループにもどります。「刃付け」でつけた傷の上に、前の傷より少し長い傷をつける。すると、はじめにつけた傷を治すために集まっていた漆の樹液が、新しくつけた傷からにじむように出てくる。職人は、ヘラを使って漆を素早（すばや）く掻き集めていく。
3. 裏目掻き 4. 止め掻き：「刃掻き」（へんがき）が終わったあとも、まだ、木に残っている漆をとるために「裏目掻き」（うらめがき）や「止め掻き」（とめがき）を行う。
5. 枝掻き：止め掻き（とめがき）が終わると、漆の木は、切りたおされる。木の枝に残った漆を掻き取る仕事を「枝掻き」（えだがき）といい、枝を束にして水に浸け、樹液が枝の中を流れ出したところで掻き取る。
6. 根漆：切り株や木のれる漆のことを「根漆」（ねうるし）という。



■漆産業を残す！

これは、漆掻きの人が漆を集める「たかっぱ」とか「筒」とか呼ばれている道具なのです。これは朴木の外側の外皮でできています。この漆筒だけでも物語があるんですね。日本人というのは物があると会話ができるので、物がないと会話がしにくいのです。ですから、茶室の中で会話をするために茶道具が大切なように、この「筒」に花が生けられていると、「あれはどのような道具で」ということで会話が成り立つんですね。自分も「日本文化財漆協会」という会を作って会長をやっているのですが、この会が発足して30年になるのですけれども、岩手県の浄法寺を中心とした山の中に7万本の漆を植えました。400本あると1年間で30貫(100kg)くらいの漆が採れるのですけれども、文化財漆協会は会員性にして会員に日本漆が使えるように、文化庁からも助成を受けて苗木を育て、植林し、採れた漆を生成する作業に努めています。こうして漆産業が守れるように努力しています。



■漆器を作る！

漆器の作り方を乾漆で説明しますと、まず石膏で原型を作ります。作った石膏に米糊を薄く溶いて塗るんです。原型に和紙を貼り、細かい麻を貼って、その上に少し粗い麻を貼って4枚くらいの厚みがこれくらいになるのです。この作業では漆と米糊を合わせた接着剤で貼っています。こうした作業が終わると、今度は生漆を捏ね鉢に入れて太陽光線の下で攪拌して、漆の中にある20%くらいの水分を4%くらいまで蒸発させます。カフェオレみたいな色の漆を攪拌して薄口醤油のような色に変えるのです。その中に鉄分（鉄粉）を入れて黒漆を作り塗っていきます。

今回は増村先生の生い立ちから漆産業のこと、漆器の製作工程、デザインの話など盛り沢山でした。